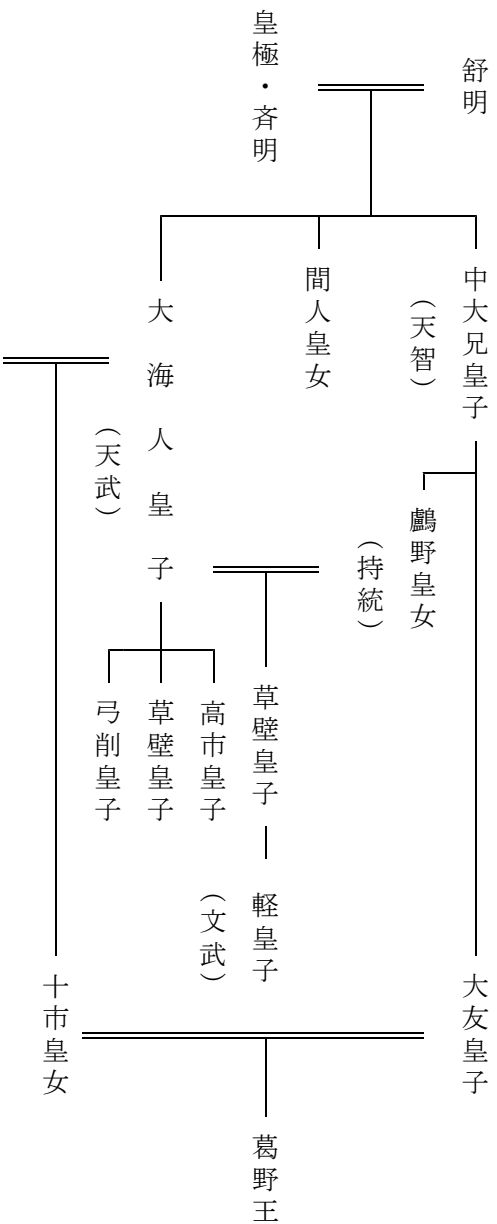


額田王

A 天皇、有司に命せて壇場を設けて、飛鳥浄御原宮に即位す。正妃を立てて皇后とす。后、草壁皇子尊を生れます。先に皇后の姉大田皇女を納して妃とす。大来皇女と大津皇子とを生れませり。…：天皇、初め鏡王の女額田姫王を娶して、十市皇女を生しませり。(日本書紀 天武二・二一・二七)

B 王子は、淡海帝の孫、大友太子の長子なり。母は浄御原帝の長女十市内親王。…：高市皇子薨りて後に、皇太后王公卿士を禁中に引きて、日嗣を立てむことを謀らす。時に群臣各私好を挟みて、衆議紛紜なり。王子進みて奏して曰く、「我が国家の法と為る、神代より以来、子孫相承けて、天位を襲げり。若し兄弟相及ぼさば則ち乱此より興らむ。仰ぎて天心を論らふに、誰か能く敢へて測らむ。然すがに人事を以ちて押さば、聖嗣自然に定まれり。此の外に誰か敢へて間然せむや」といふ。弓削皇子座に在り、言ふこと有らまく欲りす。王子叱び、乃ち止みぬ。皇太后其の一言の国を定めしことを嘉みしたまふ。特闕して正四位を授け、式部卿に拜したまふ。時に年三十七。(懐風藻 葛野王)



額田王の歌

① 熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな (一・八)

右、山上憶良大夫の類聚歌林を検ふるに曰はく、飛鳥岡本宮御宇天皇の元年己丑、九年丁酉の十二月己巳の朔の壬午、天皇・太后、伊豫の湯の宮に幸す。後岡本宮馭宇天皇の七年辛酉の春

正月丁酉の朔の壬寅、御船西に征きて、始めて海路に就く。庚戌、御船、伊豫の熟田津の石湯行宮に泊つ。天皇、昔日より猶し存れる物を御覧し、当時忽感愛の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷しびたまふといへり。即ち此の歌は天皇の御製そ。但し、額田王の歌は別に四首あり。

《参考》

- a 御船西に征きて、始めて海路に就く。（日本書紀 斉明七・一・六）
b 御船、伊豫の熟田津の石湯行宮に泊つ。（同 斉明七・一・一四）
c 御船、還りて娜大津に至る。（同 斉明七・二・二五）
d 天皇、朝倉宮に崩りましぬ。（同 斉明七・七・二四）

e 皇太子の妃蘇我造媛、父の大臣、塩の為に斬らると聞きて、心を傷りて痛み惋ふ。……造媛、遂に心を傷るに因りて、死ぬるに致りぬ。皇太子、造媛徂逝ぬと聞きて、愴然傷怛みたまひて、哀泣みたまふこと極めて甚なり。是に、野中川原史満、進みて歌を奉る。歌ひて曰はく、

山川に 鴛鴦二つ居て 偶よく 偶へる妹を 誰か率にけむ（其一）

本毎に 花は咲けども 何とかも 愛し妹が また咲き出来ぬ（其二）

皇太子、慨然頽歎き褒美めて曰はく、「善きかな、悲しきかな」といふ。乃ち御琴を授けて唱はしめたまふ。絹四匹・布二十端・綿二裏賜ふ。（同 大化五・三）

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艶と秋山の千葉の彩とを競憐はしめたまふ時、額田王、歌を以ちて判る歌

②冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど山を
茂み 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば
取りてそしのふ 青きをば 置きてそ歎く そこし恨めし 秋山われは（一・一六）

③味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隈 い積るま
でに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 情なく 雲の 隠さ
ふべしや（一・一七）

反歌

④三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや（一八）

右二首の歌、山上憶良大夫の類聚歌林に曰はく、都を近江国に遷す時に三輪山を御覧す御歌そ。日本書紀に曰はく、六年丙寅の春三月辛酉の朔の己卯、都を近江に遷すといへり。

《参考》

a 都を近江に遷す。是の時に、天下の百姓、都遷すことを願はずして、諷へ諫く者多

し。童謡亦衆し。日日夜夜、失火の処多し。(日本書紀 天智六・三・一九)
b 皇太子即天皇位す。(同 天智七・正・三)

天皇、蒲生野に遊獵したまふ時、額田王の作る歌

⑤あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る(一・二〇)

皇太子の答へましし御歌 明日香宮に天の下知らしめしし天皇、諡して天武天皇といふ
⑥紫草のほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも(二一)

紀に曰はく、天皇七年丁卯、夏五月五日、蒲生野に從獵したまふ。時に大皇弟・諸王・内臣と群臣、悉皆に從そといへり。

《参考》

a 天皇、蒲生野に縱獵したまふ。時に、大皇弟・諸王・内臣及び群臣、皆

悉に從なり。(日本書紀 天智七・五・五)

b 菟田野に葉獵す。(同 推古一九・五・五)

c 天皇、山科野に、縱獵したまふ。大皇弟・藤原内大臣及び群臣、皆悉に從につかへまつる。(同 天智八・五・五)

額田王、近江天皇を思ひて作る歌一首

⑦君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く(四・四八八)

鏡 王女の作る歌一首

⑧風をだに恋ふるは羨し風をだに來むとし待たば何か嘆かむ(四八九)

《参考》

中大兄 近江宮に天の下知らしめしし天皇の三山の歌(反歌は省略)

a 香具山は 畝火ををしと 耳梨と 相あらしひき 神代より 斯くにあるらし 古昔も 然にあれこそ うつせみも 孀を あらしふらしき(一・一三)

天皇の大殯の時の歌二首(そのうちの一首)

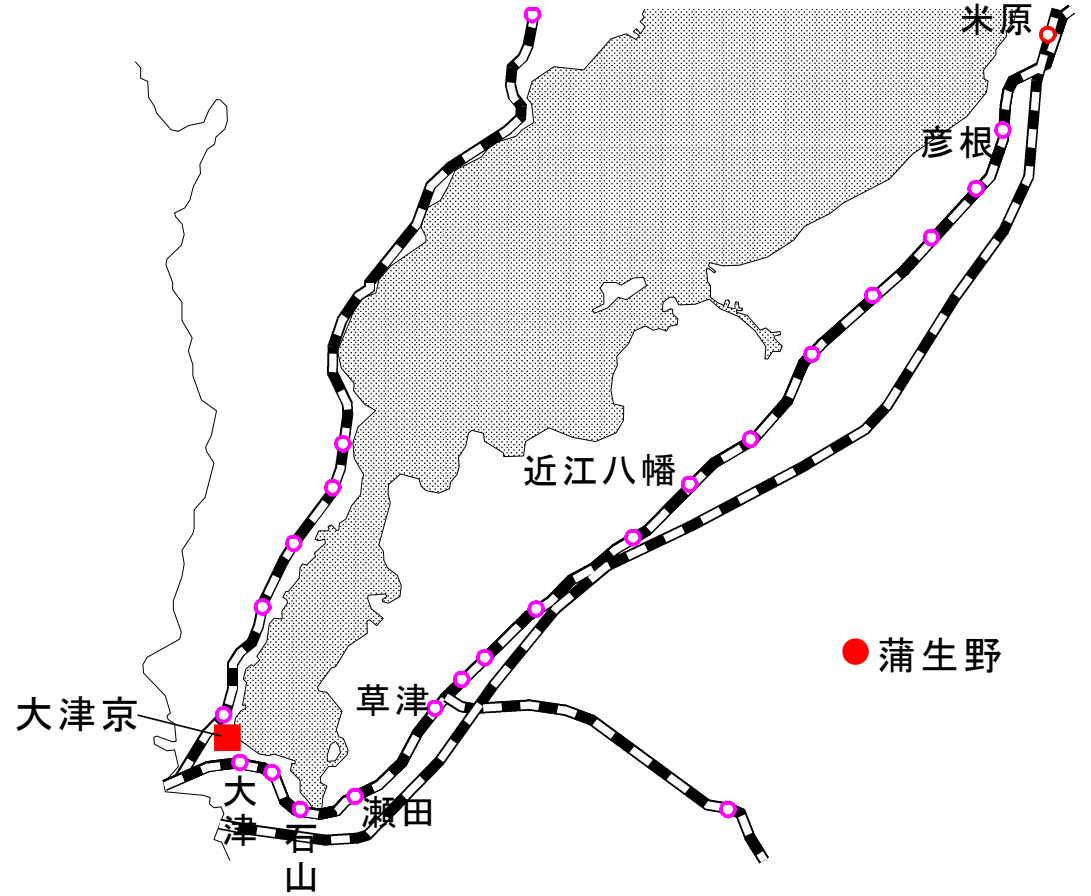
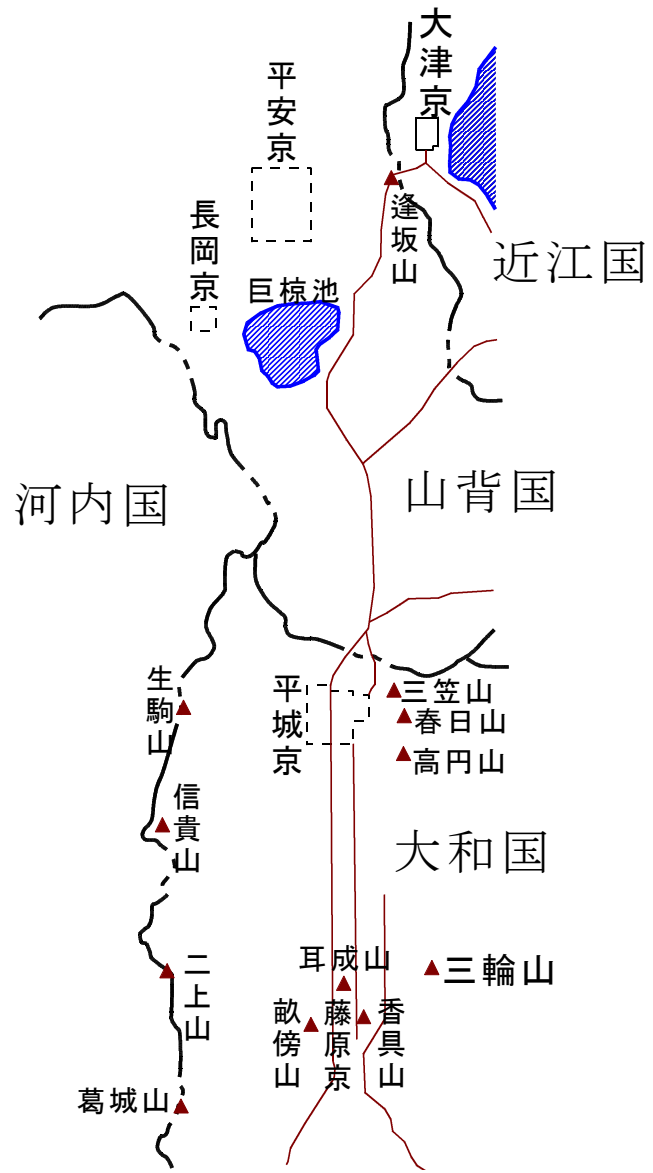
⑨かからむの懐知りせば大御船泊てし泊りに標結はましを 額田王(二・一五一)

吉野の宮に幸しし時、弓削皇子、額田王に贈与る歌一首

⑩古に恋ふる鳥かも弓絃葉の御井の上より鳴き渡り行く(二・一一一)

額田王、和へ奉る歌一首 大和の都より奉り入る

⑪古に恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きしわが念へる如(一一二)



額田王関係年表

六六三	六六二	六六一	六六〇	六五九	六五八	六五七	六五六	六五五	六五四	六五三	六五二	六五一	六五〇	六四九	六四八	六四七	六四六	六四五	六四四	六四三	六四二	六四一	六四〇	六三九	六三八	六三七	六三六	六三五	六三四	六三三	六三二	六三一	六三〇	六二九	六二八	六二七	六二六	西暦							
天智						斉明						白雉						大化			皇極																		舒明			推古三四			年号
癸亥	壬戌	辛酉	庚申	己未	戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁酉	丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	干支							
									斉明			孝徳						皇極			舒明						推古			天皇															
									皇極																		先皇																		
												中大兄															蘇我蝦夷			執政															
白村江の戦い			新羅に進発。斉明天皇没			有間皇子刑死			孝徳天皇没。高市皇子生			これ以前、十市皇女生			野中川原史満の歌 大友皇子（十市皇女の夫）生						大化改新			伊豫湯行幸			これ以前、額田王生			この頃、大海人（天武）生						中大兄（天智）生			事項						
																													葛																
											1	→																		十															
											17	→																		額															

